

# 日本の異類婚姻譚における人と動物のあいだの距離

―「変身」の視点から―

中村 とも子

一、はじめに

「人間と動物の交渉は、世界各地の昔話の中に普遍的といってよいほど広く見出されるが、その交渉のあり方は文化によって一様ではない。そこには何らかの形で、その文化のもっている世界観、とくに人間とのかかわりでの動物観が投影されているとみることができ<sup>1)</sup>る」という川田順造のことは代表されるように、人と動物のかかわりを語る昔話のなかで、特に関心を引きつけるのは異類婚姻譚である。このテーマに関して、小澤俊夫、中村禎里らの先行研究がある。ヨーロッパにおいては人と動物との隔絶感が強いが、比べると、日本の場合は動物との距離が近いこと、その違いは、一神教による世界観と多神教および仏教思想の相違、また、狩猟・牧畜を生活基盤とする肉食の伝統と、農耕生活と米食の伝統の相違によるものだという指摘が定説とな<sup>2)</sup>っている。

一方、ヨーロッパ以外の地域の伝承からも、人と動物のかかわりについて論考が発表されている。日本口承文芸学会での発表に限ると、西アフリカのモシ族の伝承、アムール・サハリン地域の伝承、さらに異類婚姻ではないが、北米北西インディアンの伝承から、人と動物のかかわりをめぐる論考がある。従来<sup>3)</sup>の日本とヨーロッパ（特にゲルマン文化）の二点比較に加えて、第三点の地域、文化の特性が対比されることによって、日本の昔話の異類婚姻譚を再考する余地が生じたと思う。人と動物がかかわりを持つ場合、先行研究のいずれも特に「変身」という問題に焦点をあてている。この問題は、人が動物の姿の中に何を見ているのか、という追究につながる。人と動物のあいだの断絶感の有無は、どのくらいの距離があるのかということにつながる。本稿は、「変身」の視点から、日本の異類婚姻譚にイメージされている、人と動物のあいだの距離感を探ることを目的とする。

## 二、日本の異類婚姻譚における「変身」

筆者は以前、日本全国の動物婿と動物嫁の話を観し、結婚の理由、事実上の結婚、動物から人への変身、動物婿や嫁の迎える結末などを分析した結果、動物嫁は人間の女の姿になり、人間の男と婚姻生活を送ることがほぼ固定しているのに対し、動物婿の場合はいくつかわりエーションがあることを明らかにした。<sup>3)</sup> 陸の動物の猿や猪は人間の男の姿にならず、婚姻生活もないことが多い。対して、蛇や蛙など、水にかかわる動物が婿になる場合は、人の姿をして婚姻生活を送る比率が高くなる。数量的なまとまりからいえば、動物嫁が人に「変身」して、人と結婚することに対して、動物婿は必ず「変身」や結婚するとはいえない。このとき、動物が人の姿をとることを「変身する」と表現したが、妥当であったろうか。例えば、「蛇女房」<sup>4)</sup>では「その小僧に蛇は助けらったなどな。冬になつたけどな。したれば、その蛇、綺麗なあねこ(娘)の姿になつて寺の家さ入つて来たなですけど」と語られている。「蛙女房」<sup>5)</sup>では「竹で蛇の方を叩いてそして蛙を出してやつたらまことに喜んで川の中へ逃げて行つたですなあ。そしてある日のこと、きれいな娘さんがその男のところに来てなあ」「蛇婿人」<sup>6)</sup>の水乞型の場合、「日照りに困つた爺が水をかけたものに三人娘のうちひとり嫁にやると」ひとらごと言うたと。そしたらそれを聞いて

ね、あの、若いきれいな男がそこから出てきて」となっている。手元の資料をアットランダムにあたつてみたかぎりだが、日本の語りでは「変身して」ということは使われず、「になつて」あるいは、「来て」「出てきて」ということばが使われており、動物が人の姿をとる瞬間や過程をはっきりと語らない。

正体が判明する場面ではどうだろうか。「蛇女房」では、出産のために小屋にこもつた女房が七日間待つてくれと頼むが、待ちきれずに三日目に夫がのぞくと、「入口で中ば見だればな、その娘こはいねくて、こういう大蛇だけだ。大蛇がグリ、グリ、グリと絡まがつておほこなししたとごだ」と。「蛙女房」の場合、里帰りする嫁のあとを夫がつけていくと、山中の堤に着く。「その堤のそばまで行つたら、荷物も着物もみんな負うたまんま、ドボンと飛びこんで、ガアガアその蛙が、なんと鳴いとるですなあ」。「蛇婿人」の語りでは、末娘が父親に、ひょうたんを千個用意して中に針一本ずつ入れて池に浮かせてくれと頼み、父親がその通りにする。「ほしたらその娘が言うには、『このヒヨウタンをみんな沈めてくられれば、おらお前さんのどこへ行くから、このヒヨウタンをみんな沈めてください』とこいうがんですと。ほうすつと大蛇が出て、コウコウしてまあ、そのヒヨウタンをまあ、沈めるんですとて」。正体がわかる場面でも、人の姿から動物へ変わる過程や瞬間を語っていない。それまでの人の形と動物の形が、どの瞬間に変わったのか、非常にあいまいである。

このような日本の語り方と対照的な「変身」の場面を語る話がある。アフリカ・リベリアの「ヒヨウ女<sup>(7)</sup>」という話では、男と女が赤ん坊を連れて旅をし、食べる物がなくなったとき、野原でヤブ牛の群れに出会う。男が女に、あなたは何でも好きなものに姿を変える力がある、ヒヨウになって牛を一匹捕まえてくれ、と頼む。「女は意味ありげに男を見て言った、『本気でそうおっしゃるの？ それとも冗談なの？』」「本気だよ」と男は言った。ひどく腹がへっていたのだ。女は赤ん坊を背中から下ろして、土の上に寝かせた。女の首にも体にも毛が生え始めた。手と足は獣の四つ足になった。そして、あつという間に、荒々しいヒヨウが男の前に立って、恐ろしい目で男をにらんでいた。男は恐ろしさに固まる。男に十分思い知らせてから、ヒヨウが牛を捕まえると、男はもとの女の姿にもどってくれと懇願する。「ゆつくりと、ヒヨウの毛が消えて行き、獣の四つ足が見えなくなった。そしてとうとう、女がまた男の前に立った」。ここでは、女の形体変化が時間の経過とともにきわめて視覚的に語られている。このような「変身」は、ある主体の意志的な行為だとすれば、日本の動物の姿の変容は意志的なものとはいえない。「になつて」「来て」「出て」という語り方は、人間の目に見えている情景として語られているからである。日本の場合、動物が「変身する」ということは語りの実際と向き合っていないことばだと自覚されながらも、ヨーロッパ型の話と比較する都合上、「変身する」と同義語として文脈上で使わ

れてきた。しかし、この「になる」「やってくる」ということばのあいまいさが、日本の場合、動物と人の関係をさぐるキーポイントになると考える。

ヨーロッパ型の異類婚姻譚では、動物は魔法をかけられた王子や王女で、人間の姿にもどるまでの救済が話のテーマである。<sup>(9)</sup>グリム童話集の一番目に収められている「蛙の王様<sup>(10)</sup>」では、一緒にベッドに入れないと父王にいつけるという蛙がまんできなくなった王女が「蛙をつまみあげて、力いっぱい壁にたたきつけた。(中略)ところが、蛙は落ちた途端に、もう蛙ではなく、きれいなやさしい眼をした王子だった」と語られる。魔法にかけられた王子は王女の行為によって救われ、蛙から人間への変身の瞬間が明確である。魔法を解いてもとの姿に戻すには、手段が必要とされ、主人公を動物の姿から人間の姿に戻して幸福な結婚で終る。このような話がヨーロッパ型の動物婚の典型であるが、日本の場合、嫁や婿の正体が動物だと判明した時、人と動物は別れて、話は終る。だが、ヨーロッパの話の中にも、日本の場合と同じように異類の正体が判明して別れて終る場合があると、先行研究に示されている。小澤俊夫は、人と妖精の婚姻を語る、メルジーネ、ローエングリーンなどの伝説がそれに当たるとし、ヨーロッパの各民族の本来の民間信仰の自然神が、キリスト教の伝播とともに追放され、魔的なものとされた結果、「素性を知られたら人間との結婚生活を失うもの」として、日本では野生の動物(かつては信仰の対象であった

が今では信仰性は失われている存在（原文要約）が想定され、ヨーロッパではキリスト教によって魔性のものとされた民間信仰の自然神であった妖精たちが想定されている」と述べている。ドイツ語圏の異類婚の分析を行った間宮史子は、妖精の娘が正体を知られたにもかかわらず、人間の夫と幸福な結末を迎える話があること、また、魔法による説明なしに、もともと動物であったものが人間に変身したと考えられる話を挙げている。これらの指摘にあるように、ヨーロッパにおいても、古層文化の影響が残る例も見受けられるが、おおかたは、のろわれた人間の救済物語であり、人と人の同類婚であることは周知のことだろう。

日本における、ヨーロッパ型の異類婚は「たにし息子」として良く知られている。はかりごとで長者の娘を嫁にするが、お礼参りに行く途中、娘はたにしを踏み潰す。「むすめはえんぎわるがって、こんちくしょうめ、てんで、足もとにころころしてつぶを、げたでふんつぶしたと。ほうしたところが、つぶの殻がばかっつとわれて、なかからいい若さむらいが、ぴよんと出てきたてや」<sup>(13)</sup>。たにし息子は、「蛙の王様」と同じく、娘の手荒な手段によって人の姿にもどっている。このように、人が動物だと思つて結婚するが、その本質は人であるという話は、洋の東西を問わず伝承されてはいる。が、日本の場合、このようなタイプは例外的であり、動物から人へ「変身する」ことに、ヨーロッパ型ののろいからの救済というような、明確な説明機

能はないといつてよい。

動物の姿が変わる場面のあいまいさ、「になつて」とか「やつてきた」ということばは、しかし、日本独特のものではないことが、先行研究に示されている。川田順造は西アフリカのモシ族の口承話約六〇〇を扱い、モシ族の異類婚姻譚を分析した。川田は「人間・動物間の明らかかな『変身』がきわめて少ないこと」「呪力をもつた尾で触れる例を除けば、すべての変身が自発的に、変身の原因、過程などについての説明一切なしで無造作に行われている」と述べている。また、大蛇が人間の男性に変身して娘と結婚する例を六話挙げ、こう述べている。「ヘビから人間への変身はさりげなく語られている。(略)ヘビが『脱皮する』(take) という動詞が使われているほかは、すべて単に『なる、変る』(change) という、日常他の脈絡でよく使われる動詞で表わされている」。先に述べた日本の動物の「変身」の語られ方ときわめて似ている。また、ヨーロッパ型の場合、「変身」する理由や、もとの姿に戻る過程が、話の筋の中心的な展開になっていることと対照的に、モシ族の話では、目の前の動物がどのような姿を現わしているのか、関心をもたない場合もあると川田はいう。「話者は娘の家での男を指すのにも大蛇ということばを用いており、話を聞く側にとつても、それはつきり人間の形をしていたのかどうかは大した関心事ではないようだ」。蛇が男の姿をとつて娘の家にいる場面で、語り手はその「男」を示すのに、「大蛇」ということばを使ったとい

うことである。人なのか蛇なのか、語り手も聞き手も重大なことではないという点は、人間が異類に対して、その表層を被うものを無視して、その内部を見ているのではないかと暗示され、興味深い。日本の場合も、よく似た例を見ることができよう。一例として、次の「蛇婿人」<sup>16</sup>を挙げる。爺が水門の上にいる若者に水を乞うと、水を入れてくれたので、末娘が嫁に行くことを承知する。「一週間したら若者が羽織はかまで、りっぱな男になって娘コを迎えに来たどさ。若え者あ酒コ飲んで酔ってしまったどさ。娘コが蛇だと針を刺せば死ぬという話コ聞いてらどごで、行く途中、若え者のそばさ寄って、チクリど刺してみたら死んでしまったどさ」。結末部で、娘が蛇に針は毒だという知識を持っていたというくだりになるまで、蛇ということばは使われずに話はすすむ。語りの場において、若者という人の形をとっていても、真の姿は蛇だという認識が共有されている。以上のように、日本の話の中で、人間は、目に見えている姿から、その存在が人間だと思って結婚する。正体が判明する時も、人間の目から見た、人から動物への変容なのであり、ヨーロッパ型の話と対照的に、動物が変身する理由や手段については語らない。だが、動物が人の領域に滞在するためには人の姿になることが前提である。人と動物のあいだには越えなくてはならない境界があることがはっきり認識されている。動物が動物の姿のまま人間のパートナーと長い時間を共有することはできない。共生するには同じ姿になることが必要である。<sup>17</sup>

### 三、着脱による変身

皮や殻を着脱することによって動物から人へ、またはその逆に「変身」することは、日本の場合はほとんど語られないが、世界中の多くの民族ではよく語られている。「カメと少女シタ」<sup>18</sup>という、アフリカ・イラク族の話では、娘を見初めたカメがベッドに一緒に寝かせてくれと頼むが、娘は無視する。「ところが、三人の娘たちが寝静まると、カメはムックリ起き上がり、ベッドの上によじ登った。そして、三人の娘たちのあいだに、ひそかに割りこむと、そのまま、寝こんでしまった。驚いたことに、その寝姿は真白だった。カメが寝るまえ、甲羅をとったからです」。カメが人間に戻る場面は「ふたたび夜がきた。カメはみんなからいじめられ、仕方なく炉の近くに横になった。ところが、うっかり炉に近づきすぎて、真白い身体に燃え木の火がついた。その瞬間、みんな『アッ』と驚いた。不思議なことに、あたりが燃え上がる火で明るくなるとともに、カメはすばらしい青年に変化したのです」と語られている。ここでも、甲羅の着脱による変身や、手荒な行為がカメを人の姿にとどまらせることを語っている。エスキモーの「狼の花嫁」<sup>19</sup>は、アザラシを獲って、娘の家にもつてくる狼とクズリが人の姿をして登場する場面を、「夕方、彼らは外に人の足音を聞いた。それからドアが開いて、狼の毛皮で縁取りした着物を着た若い男が

入ってきた」と語っている。クズリもやはりクズリの毛皮で縁取りした着物を着ている。娘は狼の国に迎えられてしばらくそこで暮らすが、そのときに「彼らが彼女の着ていた古い着物を脱がせ、新しい着物を与えて着せた」と語られている。こうしてみると、このエスキモーの場合、狼が人間の領域に来る時には特別の毛皮の着物を着、娘が狼の領域で滞在する時はそこで与えられる着物を着ていなくてはならないということになる。

北方民族の人と動物の婚姻譚について、荻原眞子は「人の相手になる動物にはクマ、トラが多く登場するが、そのような獣ばかりではなく、海獣や鳥もある。特に、婚姻譚では、人は男も女も同じようにさまざまな動物と夫婦になり、子供をもうける。そしてこのような人と動物の緊密さについての伝承に共通する特徴は、獣や鳥や海獣がみなその本質においては『ヒト』であるという観念である。すなわち、動物は毛皮や羽毛を着けることによってそれぞれの姿を持つのであって、自らの世界でその被衣を脱ぐと、『ヒト』の姿に戻るという。それゆえ、この変身は、動物に固有の特性であって、人間の属性ではない。いわゆる『異類婚姻譚』は非常に広範な地域に認められるが、このような『動物すなわちヒト』という観念を背景とする伝承は、特にアムール・サハリン地域、沿海州から北東シベリア、さら、アラスカ、アメリカの北西海岸に顕著であるように思われる」と述べている。<sup>(20)</sup>人間が衣服を着脱するように、動物は、人の領域に滞在する時には毛皮や羽毛を着て動物の姿をとつ

ているが、動物の領域に戻るとそれらを脱いで「ヒト」の姿になるといふ。これは、日本の動物嫁や動物婿の「変身」と逆転している点である。特に日本の動物嫁は、人間のパートナーとなつているあいだは「女」という「ヒト」の姿をとり、自分の領域へ帰っていくときにその本来の動物の姿を現す。いいかえれば、日本の動物嫁は、動物の姿のままに人間の領域に滞在することできないことである。<sup>(21)</sup>北方民族の「動物すなわちヒト」といふ、両者の本質は同じだとする観念と照らし合わせると、日本の昔話が伝えている観念は、人間と動物は本質的に異なる存在であるということだ。正体が判明した途端、動物嫁は自分の領域へ去る。動物嫁の話が人間との別離で終る理由も、この観念が働くからである。動物がその真の姿を現すと、人は、今まで嫁だと思つていた相手が自分とは本質の異なる存在だと知る。ゆえに、両者は同じ領域に共生できず、動物嫁と人は別れる。

ここで、再び、話は誰の眼を通して語られているかという点にもどる。益子待也は北米北西沿岸のインディアンの異郷訪問譚を分析し、次のように述べている。「例えば、科学としての動物学は人間の目から見た動物の生態を詳しく観察する。だが、そこには、動物たちも同時に人間たちの生態を観察しているかもしれない、という発想はない。もし、人間が動物を観察するのと同じように、動物たちも人間を観察しているとすれば、その時、人間の側から見た動物学と逆の方向性をもつ、いわば

動物の側から見た人類学が存在する事になる。北西沿岸インディアンは、この動物の側に立つて考える、という複眼的な視点をもっていたように見える<sup>(22)</sup>。益子が紹介した、鮭の国という異界を人間が訪問する話では、人間の世界と鮭の世界の物事の見え方が逆転している。鮭は人間にすべて余さず利用されつくして初めて再生できるが、人間が食べ残したり保存したりすると再生できずに「病氣」になる。あるいは、人間の目に「いくら」と見える魚卵は、鮭の国では「糞」であるなど、人間の側からだけでなく、鮭という異類からの視点も語られる。この点が「複眼的な視点」である。このような視点は、先に挙げた萩原の指摘による北方民族の觀念に共通する。益子は、人間と動物のあいだの違いは毛皮があるかないかだけであり、「毛皮をとつたら、動物たちの靈魂は、人間の靈魂と変わらない」と述べている。

日本の場合、動物が人の姿をとるとき、あるいは、人の姿から本来の動物の姿に戻るとき、語られる視線は、人の目からの一方向だけである。人の目から見、鶴は女になるが、人がその正体を知ると、また鶴にもどる。このときに、狐になったりはしない。北米インディアンやアフリカの話の中には、初めは動物として登場するが、人に変身し、それからまた別の動物へ、さらには太陽や風などの自然現象へと変わっていく話もある<sup>(23)</sup>。日本では、一つの種として登場した動物が二番目の種の動物に「変身」することはない。動物は表層を羽毛や毛皮で覆わ

れていることは北方民族と同じであるが、その着脱による「変身」が日本の異類婚姻譚には見られないことに注目したい。日本の話では、動物の外見が本質を現しており、「ヒト」と同じ魂が毛皮のなかに存在しているという觀念がない。ゆえに、動物は毛皮を着脱するとは語られないのだろう。

#### 四、変身しない動物

日本の「猿婚入り」の猿は動物の姿のまま人とかわる。エスキモーやアフリカの中にも動物が動物の姿のまま人と結婚する話がある。エスキモーの「大きないも虫を夫にした女<sup>(24)</sup>」では、女が山中で迷い、顔は人間のいも虫が追ってきて女を妻にする。いも虫は女を大事にして腹いっぱい食べさせ、女は顔は人間でからだはいも虫の双子を産む。「人間の女とさめの間に生まれた子どもたち<sup>(25)</sup>」では、娘が一日中出かけており、父親があとをつけると、娘がさめを呼び寄せているので父親は驚く。娘はさめの子を一〇匹産み落とす。ここでは、娘たちはパートナーが異類であることを最初から知っている。そして、異類の子どもを産むことを躊躇していない。

アフリカにも、初めからパートナーが人間ではないと知っていて結婚する話がある。「瓜とオンドリ<sup>(26)</sup>」では、王女がゴミ捨て場に成った瓜をたたくと、瓜が王女を追い回す。王女がオンドリに助けを求めると、オンドリは結婚すると約束したら助け

てやるという。王女が承知すると、オンドリは瓜を切り裂き、王女を妻にする。この王女は凶暴な瓜から逃れるため、安全を約束したオンドリを正しく選択している。

初めからパートナーの正体を知りながら、自分の利益になるので結婚し、しかも別離で終わらないという話は、日本にはない。人の姿にならず、動物のままに結婚する話には、蛇、猿、猪、犬などが登場する婿入り譚がある。娘がこれらの動物と結婚するもつとも大きな理由は日本の場合でも、日照りの解消や耕作の手伝いなど、娘自身への利益ではないが、娘の家族のための労役の報奨なのである。<sup>27)</sup>しかし、動物婿が約束を果たすにもかかわらず、娘は動物婿を排斥し、逃れてくる。エスキモーやアフリカの話と同じく、娘は最初から動物の正体を知って結婚を承知するが、結末は大きく異なる。日本の場合、これらの動物婿が動物のままに登場するのは、エスキモーやアフリカの場合と質的に異なる理由だと考えられる。エスキモーやアフリカの場合、動物が人にもたらず食べ物<sup>28)</sup>の豊かさや危害から守られる安全といったテーマが異類婚と結びついている。それに対して、日本の動物婿のテーマは異類退治になっている。動物が人の姿になるか否かという点から見ると、動物が嫁になる場合は女の姿をとることに固着しているが、婿になる場合は男の姿をとることに固着していない。動物の種類にもよるが、蛇と蛙以外の獣は人の姿にならないことのほうが多い。動物嫁と動物婿のこの明確な違いの理由は、人と動物が共生する時間があるかどうか

かという点にあるのではないか。動物嫁は境界を越えてやってきて人の領域に滞在する、つまり、人と共生するために女の姿になる。いずれは別れて終るが、しばらくのあいだは人間の領域に滞在する。それに対して、動物婿は、娘を嫁にもらうために人間の領域にやってくるが、それは短時間のもので、約束がなされる、つまり娘を得ると自分の領域に戻る。動物嫁の場合とは逆に、動物婿が娘と共生しようとするのは人間の領域においてではなく、自分の領域、人間にとつての異界なのである。<sup>28)</sup>動物が本来帰属している自分の領域では、動物婿は動物のままに行動する。猿婿がそうである。あるいは自分の住処まで人の姿を保っていたとしても、物語のクライマックスでは動物の正体を現す。蛇婿がそうである。このように、人と動物の共生する場所が動物の領域であるために、動物婿は必ずしも人の姿をとることに固着しないと見える。この点は、北方民族の、動物は自分の領域に戻って毛皮を脱ぐと「ヒト」になるという観念と、ちょうど逆転している。動物婿も嫁になる動物と同じく、毛皮を脱ぐという観念が日本にはないといえる。

動物婿や動物嫁は人とは質的に異なる存在であり、あくまでも動物である。人の領域において、物語のクライマックスが語られる動物嫁譚では、その本質が明らかにされた時、嫁は本来の動物の姿を現して立ち去る。一方、動物婿の領域において、物語のクライマックスが語られる動物婿譚の場合は、人である娘はその場所から抜け出して自分の属する領域へ戻ろうとす

る。娘は自分を引きとめようとする動物婿の威力を掃うため、動物婿を排斥する。動物嫁の結末が別離という形であるのに対し、動物婿は殺害というきびしい排斥を受ける。この結末の相違は、動物婿譚は異類婚姻譚というより、異類退治がテーマであるからだと思う。境界を越えて動物の領域に行つた人間が、そこから戻ってくるという、ある種の冒険譚としてとらえることも可能である。エスキモーの「狼の花嫁」と同じく、日本にも、動物の領域に行つた人間が動物と共生するには、人が動物の姿をとらなくてはならないという觀念がある。例えば、蛇測型の蛇娘の話では、蛇の領域で蛇と共生する娘は、蛇に「変身」する。しかし、このパターンをとる話は、日本では少ない。日本の動物婿の中でも複雑なのは蛇である。周知のように、三輪山伝説型の蛇婿には神性が認められるし、日本の各地の英雄伝説、緒方三郎や小泉小太郎のように、蛇の子どもに優位性を認める話も伝えられている。だが、これらの話でも、蛇婿と人は幸福な婚姻を続けたとは語られていない。蛇に対する信仰性は別におくとしても、これらの話でも、蛇婿は自分の領域にもどっていく。日本の異類婚姻譚では、人は人、動物は動物の、それぞれの所屬領域にすることに物語としての安定を見出し<sup>(29)</sup>ている。

## 五、日本の異類婚姻譚に見る人と動物のあいだの距離

人と動物のあいだの距離について考える。「距離」ということばを用いて、あるいは、文脈上「距離」を意識しての考察はすでに表明されている。筆者が目にした限りだが、いくつかの指摘を挙げる。澤田瑞穂は、動物伝説の分け方を研究する上で、「動物と人間の交渉もしくは距離」に着目した。動物をめぐる話が動物昔話、異類婚姻譚、報恩譚、伝説と多岐に関わりあっていることを整理する際、「動物と人間との距離の遠近ということを目安にして考えると、最も近いのは家畜で」、犬・猫・牛・馬から鶏・鼠などを挙げている。つぎに、通常は野山や森林に棲んでいる、「人間からみて中距離にある動物」として、狐・狸・狼・熊・野猪などを挙げて、実際の人の暮らしの中の動物との距離に着目している。続けて、「第三類は、遠距離または異邦の動物。名は聞いているが、当地では見たこともないというもの」として、例えば、清正伝説に登場する虎を、さらに、「最後の第四類は、非常なる遠距離もしくは未知未見の動物」として、神話的な動物である龍・蛟・鳳凰・麒麟などを挙<sup>(30)</sup>げている。

問宮史子はドイツ語圏の異類婚姻譚を分析した際、イギリスの人類学者エドモンド・リーチの、「人間の意識による動物の分類」を応用した。問宮によれば、リーチは「鳥類以外の陸

棲の定温動物は、愛玩動物、家畜、狩猟動物、野生動物」の四種類に分けられるとし、「愛玩動物（犬・猫・馬・ロバ・ヤギ）は、人間に最も身近で、意識のうえでも近く感じられるので、これを食べる気にはならない。逆に、狩猟の対象にはならない野生動物は、人間から離れていて、意識のうえでは対立的なので、やはりこれを食べる気にはならない。しかし、両者の中間に位置する家畜（豚、牛、羊）と狩猟動物（ウサギ、ヤマウサギ、鹿、狐）は、人間に近くもなければ遠くもなく、人間はこれらを食料に供している」と述べている。この概念を応用して分析した結果、間宮は、ドイツ語圏の動物婚として語られる動物は「婚として登場する哺乳類には、食料に供している動物よりも、人間にとっても近いが、あるいはとても離れているゆえに、食料には供されない動物が圧倒的に多い」と指摘し、特に「意識のうえでは人間から遠い野生動物が多く登場する」と結論付けている。同様に、動物嫁に登場する動物については、食料に供しない愛玩動物が圧倒的に多く、家畜と野生動物は全く登場しないと指摘し、「動物嫁では、意識のうえでは人間に最も近い愛玩動物が多く登場しており、この点が（動物婚と）筆者注）大きな違いとなっている」と述べている。<sup>(31)</sup>

川田順造は、アフリカ、モシ族の口承話の分析の結果、「動物から人間への変身が無造作に行なわれているか、もしくは変身などなしで人間との婚姻が成立しているかという点では、モシ資料は日本の昔話と共通しており、グリム昔話とは著しく異

なる。しかし、人間から動物への変身がほとんどないという点で、日本の昔話からもへだたっているのである」と指摘している。<sup>(32)</sup>

小澤俊夫は、広い地域の昔話を比較した結果、特にエスキモーの人と動物の同類意識に触れ、「同類としてのひとと動物の結婚が、ひとと動物の結婚の話のなかで、もっとも原質的なものかもしれない。そういう眼で日本の異類婚の話をみると、それは昔話における動物を、自然のなかの動物として観じているという意味で、このエスキモーの話（「かにと結婚した女」―筆者注）に近い面があるが、しかし、動物との結婚を日常的感覺で、しまいに拒否するという意味で、このエスキモーの話とはたいへん異なる。かといって日本の異類婚での動物は、ヨーロッパの場合ほど様式化されていないし、キリスト教文化の反面として魔術による裏づけもない。その意味で、日本の異類婚の話は基調としてはむしろ、ヨーロッパによりはエスキモーやパプア・ニューギニアなど自然民族の民話に近いことが認められる」と指摘している。<sup>(33)</sup>

これらの「距離」の意味は各文脈にそって理解されるべきであるが、大まかに整理すれば、現実の暮らしの中のひとと動物の棲み分け領域、暮らしの中の人が実際の動物に感じる意識的な距離、そして、口頭伝承の語り口から捕えた動物観の三つに分けることができよう。これらの観点を手がかりにした上で、動物の行為を語る視線がどこにあるかという点を加味して、日本

の異類婚姻譚に見られる人と動物のあいだの距離を考えてみた。ある民族が人と動物のかかわりをどのように語っているかということを考える際、根底に、文芸的な語り口や美意識とは別のこととして、生命と生命の相克というべきものが流れているように思う。その民族の動物に対する意識的な近さ・遠さは、益子や問宮の言及にあるように、「食べる・食べられる」という、人と動物の究極の関係性が基本にあるように思う。

ところで、北方民族やアフリカの諸民族の話と日本の話は、「変身」することへの明快な説明がなく、特別な手続きなしに「変身」することなどが共通している。北方民族やアフリカの話に見た動物たちの表層を被うものも、日本の場合と同じく、毛皮・羽毛・殻など、その動物の外見と一致している。しかし、日本の動物の「変身」のあり方と大きく違う点は、動物がそれらを着脱して自由に姿を変えることができる点である。ひとつの存在が何度でも姿を変える話もある。となると、「変身」の語られ方が似ていても、日本とこれらの民族の話を単純に比較してその動物のあるべき姿、動物としての正体は何かと考えることはできないだろう。動物の「変身」という行為の語り方を見ると、人の目に見えるものが何度も変転していることがわかる。存在の表層を被う動物の姿は何通りもあり、その存在の核を幾重にも取り巻いているかのようだ。これらの民族は、話の中の動物の真の姿を気にしていない。動物と人とのあいだに本質的な差異はなく、生き物としての魂のあり方は同じであると

意識されているからだ。北方民族の場合、人とかかわる動物は、現実には人の食料となる動物たちである。「食べる・食べられる」という関係が、人はその動物たちによって生かされているという認識を生む。現実の意味において、人と動物は共生している。その実感が人と動物のあいだに差異はなく、生き物としての魂は同じだという観念をはぐくむ<sup>34</sup>。人が動物の姿のままのパートナーと幸福に過ごす結婚の話は、この観念の投影である。

対して、日本の場合、食料となる動物は異類婚姻譚に登場しないのではないだろうか。鶴・狐・蛇・蛙・猿と、思いつくままに挙げてみると、日本の各地によっては食料にしているかもしれないが、全体としては家畜や愛玩動物ではなく、野生の動物である。また、澤田瑞穂が想定したような、見たこともない異邦の動物や、空想上の動物、あるいは問宮が指摘した、ドイツ語圏の動物嫁として顕著な愛玩動物も、日本の異類婚姻の動物としては現われない<sup>35</sup>。日本では、食料にすることのない、山・川・海という、人間界に対しての自然界に生きる野生動物が、人の姿になって、人の領域にやつてくる。これらの動物に対して、北方民族が抱いているような共生の観念は見られない。現実の意味においても、野生の動物は農耕民にとって被害をもたらすことはあっても、その存在そのものが人の生命の維持にはなくてはならないものだという認識は薄い。現実的な人と動物の関係が昔話に投影されているといえる。

動物が人に姿を変えるところにかぎると、日本の話では、

女の正体は狐である、というように「正体」は必ず明らかにされる。「正体」とは、人の目から見て、その存在のあるべき姿である。そして「正体」はひとつだけである。狐なら狐、鶴なら鶴である。人の目に見える動物の正体は本質を現し、外見と存在の核は一致している。存在の本質の表層を被うものは動物の毛皮、羽毛、皮、殻である。それらに被われることによって、狐や鶴や蛇や田螺になり、物語の最初から結末までその本質はゆらぎず、しかも、一度その本質が明らかにされると他の姿になることはない。そういう動物が「人の姿になってやってくる」という語りの視点は人の側にあり、動物の側からの視点を語ることはない。動物嫁は、しばらくの滞在ののち、正体を現わして、去る。その一連の行動を、人は「嫁だと思っていたら動物が化けていたのだ」と見る。このような「驚き」が、日本の異類婚姻譚にはつねに語られているように思う。<sup>36</sup>日本において、動物は「変身」という主目的な行為をとるのではなく、人の目には「化ける」と映る。その人の意識には、北方民族に観られるような共生感や、生命体としての同類感はない。動物の正体を知ったら共生できないという意識は、その驚きに裏打ちされている。人に姿を変えてやってくる存在は、人とは異なる存在だから姿を変えるのであり、本来ならば、境界の向こう側にいるべき存在なのである。日本の場合、人は人、動物は動物であり、両者のあいだには明確な境界があり、両者のあいだの距離はとても遠いと考えられる。

注

- (1) 川田順造「昔話における人間と動物―モシ族（西アフリカ、ブルキナファソ）の事例」「口承文藝研究」第十号 一九八七
- (2) 小澤俊夫「昔話のコスモロジー―ひとと動物との婚姻譚」一九九四 講談社学術文庫／中村禎里「日本人の動物観―変身譚の歴史―」一九八四 海鳴社 など
- (3) 中村とも子・弓良久美子・間宮史子「異類婚姻譚に登場する動物―動物婚と動物嫁の場合」「口承文藝研究」第十号 一九八七
- (4) 「三六 蛇女房（蛇むかし）」「荻野才兵衛昔話集」野村純一編『定本 関澤幸右衛門昔話集―「イエ」を巡る日本の昔話記録―』二〇〇七 瑞木書房
- (5) 「二一五 蛙女房―嫁入り型」稲田浩二・小沢俊夫責任編集『日本昔話通観 鳥取』一九七八 同朋舎出版
- (6) 「二一 蛇髻入（水乞型）（一）」真鍋真理子編著『昔話研究資料叢書一一 越後黒姫の昔話』一九七三 三弥井書店
- (7) 「四四 ヒョウ女」ロジャー・D・アブラハム編 北村美都穂訳『アフリカの民話』一九九五 青土社
- (8) 一例に、小澤俊夫の記述「それにしても、ここでもまたつるの変身それ自体について、なにも説明していない。（中略）日本の語り手はつるの変身そのものを、神のちか

らによるとも、魔法の力によるとも説明しない」／小澤俊夫前掲書(2)

また、問宮史子の次の指摘「蛇は娘のところにいる夜の間は男の姿をしています、淵の中では本来の姿にもどっていることがわかります。蛇から男へ、男から蛇への変身の場面は語られません」／問宮史子「昔話における人間と動物―日本とドイツ語圏の動物婚譚の比較」責任編集朝日由紀子『アウリオン叢書〇六 人間と動物をめぐるメタファー』白百合女子大学 言語・文学研究センター編 二〇〇八 弘学社

(9) 一例として、「動物は魔法をかけられた人間で、娘と動物の婚姻と思われたものは人間同士の婚姻です。魔法をかけられた者が動物の姿から解放されて人間の姿を取り戻すこと、すなわち魔法からの救済が話のテーマとなっており、キリスト教の救済の観念が世俗的な形であらわされているといえます」問宮史子 前掲論文

(10) 関敬吾・川端豊彦訳『完訳 グリム童話Ⅰ』一九九八 角川文庫

(11) 小澤俊夫／前掲書(2)

(12) 問宮史子「ドイツ語圏の異類婚姻譚―人間と動物の関係を中心にして」昔話研究 土曜会編『話型の成立と展開 土曜会昔話論集Ⅰ』一九九一

(13) 「五三 つぶ太郎」中村とも子編『雪の夜に語り継ぐ』

二〇〇四 福音館文庫

(14) 中村他 前掲論文(3)／しかしながら、笠原政雄の話では、結末部で神の使い鳩を射殺した罰として、たにににされていたと語られている。

(15) 川田順造 前掲論文(1)

(16) 「蛇の婿さま(水乞型)」宮本朋典編『木造町のむがしこ集』一九八四 木造町教育委員会

(17) 中村とも子「別離のイメージ―帰属世界の観点から日本昔話の婚姻譚を中心に」『昔話研究の地平 小澤俊夫教授古希記念論文集』二〇〇二 小澤昔ばなし研究所

また、人間界と動物界の間の境界について、小澤俊夫は人の側の行動様式から言及している。／小澤俊夫 前掲書(2)

(18) 「二九 カメと少女シタ」和田正平 採録・編訳『アフリカ昔話叢書 イラクの昔話』一九八三 同朋舎出版

(19) 「狼の花嫁」ハワード・ノーマン編 松田幸雄訳『エスキモーの民話』一九九五 青土社

(20) 荻原眞子「人と動物の婚姻譚―サハリン・アイヌの説話から」『日中文化研究 第六号 古代伝承と考古学』一九九四 勉誠社

(21) 中村とも子 前掲論文(17)

(22) 益子待也「鮭の村を訪れた少年―北米北西沿岸インディアン」の異界訪問譚―『口承文藝研究』第一六号

- 一九九三
- (23) 例として「二三 さけの話(ウイシユラム族)」小澤俊夫編 関楠生訳『世界の民話一二 アメリカ大陸Ⅱ』一九七七 ぎょうせい／「八七 狩人の話」フランク・エドガー編 松下周二訳『アフリカ昔話叢書 ハウサの昔話』一九八三 同朋舎出版
- (24) 「二七 大きないも虫を夫にした女」小澤俊夫編 関楠生訳『世界の民話二四 エスキモー他』一九七八 ぎょうせい
- (25) 「二五 人間の女とさめの間に生まれた子どもたち」小澤俊夫編 関楠生訳『世界の民話二四 エスキモー他』一九七八 ぎょうせい
- (26) 「七一 瓜とオンドリ」フランク・エドガー編 松下周二訳『アフリカ昔話叢書 ハウサの昔話』一九八三 同朋舎出版
- (27) 中村他 前掲論文(3)
- (28) 人と動物の関係を「異界との距離のとり方」と間宮史子は規定している。間宮史子 前掲論文(8)
- (29) 中村とも子 前掲論文(17)
- (30) 澤田瑞穂「動物と伝説」『日本の伝説と民俗』／歴史公論 一九八二年七月号
- (31) 間宮史子 前掲論文(12)
- (32) 川田順造 前掲論文(1)
- (33) 小澤俊夫 前掲書(2)
- (34) 益子待也 前掲論文(22)
- (35) 中村他 前掲論文(3)／澤田のいう「遠距離、異邦の動物」として、沖縄や南西諸島には熊・ライオンが登場する。
- (36) 中村とも子「昔話狐女房とは何か―口承が受容するもの」としなものの「一考察」昔話研究 土曜会編『土曜会昔話論集 昔話の成立と展開二二〇〇〇』  
(なかむら・ともこ／東京都)